第9回 SEAMIC セミナー

The 9th SEAMIC Seminar

高 野 史 子*

東京医科大学図書館

Takano, N. : The 9th SEAMIC Seminar, *Igaku Toshokan* 28(4) : 306-313, 1981

The 9th SEAMIC Seminar held at Surabaya, Indonesia on 26-31 of August, 1981 is reported. The SEAMIC (Southeast Asian Medical Information Center) is one of the main projects which the International Medical Foundation of Japan is executing under the subsidy of the Japanese Government. SEAMIC's purpose is to contribute to the promotion of health planning in the region of the Southeast Asia by providing, exchanging and generating information on a multilateral basis. 16 persons from Indonesia, the Philippines, Malaysia, Thailand, Singapore, Japan and WHO discussed the theme of the Seminar, "Multilateral Collaboration on SEAMIC Health Sciences Documentation and Library Services Activities" through technical papers and country reports. The technical papers, country reports of the state of the arts and recommendations for the SEAMIC are summarized. The main recommendations are : 1) Book Donation Program is satisfactory, however, the list can be further improved to make it more balanced in subjects and publication countries as well. 2) Interlibrary lending service is recommended to be carried out more between SEAMIC member countries rather than relying solely on SEAMIC Tokyo. 3) It is recommended that PHLOSEA (Periodical Holdings in the Libraries of Southeast Asia) be expanded into a Union List of Serials in Medical and Health-related Subjects to facilitate interlibrary loans. 4) Each country is urged to prepare a bibliography of national bibliographies on medical and health-related topics for possible collation and publication by SEAMIC. 5) Active collaboration is expected of Advisory Committee on Publication in each country. 6) A joint training program by SEAMIC and other agencies, hosted by SEAMIC member countries on a rotational basis is proposed. 7) SEAMIC is requested to explore the possibility of collaboration with other agencies working in this region in all activities possible.

I. SEAMIC について

このたび第9回 SEAMIC セミナーに参加し東南アジアの医学図書館の人々と親しく接する機会を与えられた。SEAMIC については、裏田氏の詳細な紹介¹⁾があるのでそれをご参照いただき、私は今回のセミナーに参加することで知ることができた事をご報告させていただきます。

第9回 SEAMIC セミナーは、1981年8月26日から

8月31日まで、インドネシアのスラバヤ市において開催された。SEAMIC (Southeast Asian Medical Information Center) は財団法人日本国際医療団(外務省管轄)の行う東南アジア諸国への医療援助の一形態であり、医療情報や医学・保健知識・技術の交流を促進することによってこの地域の保健・医療の向上をはかることを目的とし、図書館活動もその活動の柱の一つとなっている。この目的達成のため1972年に設立されて以来、SEAMICはコンフェランス、セミナー、ワークショップ、訪問研修などの開催と、医学文献等の複写、二次資料を含む出版物の刊行、MEDLINEの検索などを行ってきている。現在 SEAMIC に参加しているの

*Nobuko TAKANO: Tokyo Medical College Library,
7-1 Nishishinjuku 6, Shinjuku-ku, Tokyo 160, Japan,
(昭和56年11月5日 受理)

は、フィリピン、マレーシア、インドネシア、シンガポール、タイの5ヶ国で、本部の形で日本が加わっている。国際協力事業とは言いながらこれまでは全財政を負担している日本とこれらの国々との間は5ヶ国対日本、あるいはサービスの受け手と貸し手の一方通行の感はぬぐえなかったというが、近年これを多国間相互の協力関係に発展させるべきではないかという意識が参加国の中で生まれた。すなわち参加5ヶ国の資源を生かして役割を分担し、SEAMICの事業をより有効に活用しようというもので、今回のセミナーはそのような経緯をふまえ、テーマを“Multilateral Collaboration on SEAMIC Health Sciences Documentation and Library Services Activities”と決めた。またSEAMICの各種会合は必ずしも図書館関係を対象としたものばかりではなく、この事業の目的を達成するのに必要な、感染症データ交換サービス、保健・衛生統計の収集・分析、文献情報サービス、出版活動の四本柱に関係して行政担当者、医師、看護婦、医学研究者、そして図書館関係者などその活動に従事するすべての要員を対象にして、各種レベル、テーマでひらかれている。今回の第9回セミナーはその中の医療図書館員を対象にした集会である。

SEAMICの図書館サービス関係の事業は、参加各国の中心となる人、あるいは連絡係となり得る指導的な立場の図書館員をKey personという名称で指名し、日頃からこの人々を通してあらゆる意見交換や東京との間の事務連絡をとるシステムを持っている。各国それぞれの事情を持つ国際協力事業においては、人的なつながりがまず大きく事の成否を左右するというわけで、それを非公式なつながりから組織的な関係に発展させてあるところは、SEAMICのユニークな点だと言える。

II. セミナーについて

第9回SEAMICセミナーは、(財)日本国際医療団が出資し、インドネシア共和国保健省が主催者という形になっている。すなわちセミナーのプログラムの細部、参加者の参集、宿泊、会場設定などはDr.A.A. Loedin (Head, National Institute for Health Research, Ministry of Health, Indonesia)を組織委員長とする現地スラバヤとその周辺の医療および医療図書館関係者が世話をして下さった。テーマは前述のと

おり「多国間協力」であり、①これまでのSEAMICの医療情報サービス関係活動の総括と今後、②SEAMIC参加国の医療情報サービスネットワークの開発の2点から協議した。

1. 参加者

参加者は各国からKey personを含む3名、うち1名は医科大学関係者が望ましいとされていた。実際の参加者は次の人々である。

フィリピン

- * Miss Clarisa G. Dimalanta (Medical Library, University of the Philippines System)
- Mrs. Rosvida Rosal (Institute of Public Health, University of the Philippines System)
- Mrs. Iluminada Tidon (Jose R. Reyes Memorial Hospital, Ministry of Health)

マレーシア

- Mrs. Miskiah Ahmad (Medical Faculty, National University of Kuala Lumpur)

シンガポール

- * Mr. Michael Cheng (Medical Library, University of Singapore)

タイ

- * Miss Uthai Dhutiyabhodhy (Siriraj Medical Library, Mahidol University)
- Mrs. Chira Intakosum (Faculty of Medicine, Chulalongkorn University)
- Dr. Supathana Dhibanuka (Division of the Health Statistics, Office of Under Secretary of State of Public Health)

インドネシア

- Ms. Luwarsih Prhinggoadisuryo (The Indonesian National Scientific Documentation Centre)
- Mr. Bambang Hartono (National Institute of Health Research Division, Ministry of Health)
- Miss Sri Soenarni Pringgoutomo (Library, Faculty of Medicine, University of Indonesia)

日本

- * 津田良成教授 (慶応義塾大学文学部図書館情報学科)

天野善雄氏 (国際医学情報センター)

高野史子 (東京医科大学図書館)

その他

* Mrs. Parlinah Moedjono (Headquarters Office, W.H.O., Geneva)

Mrs. Khin Thet Htar (Regional Office for South East Asia, W.H.O., New Delhi)

*印はその国の Key person を示す。マレーシアの Key person の Mrs. Tsu-Ping Woodhull は今回は欠席、インドネシアの Key person の Mrs. Moedjono はスラバヤ市の Airlangga 大学図書館長から現在 WHO 本部 (ジュネーブ) に出向中であり、今回のセミナーには WHO 職員の形で参加した。なお WHO は SEAMIC の参加国ではないが今回のセミナーでは 2 題の発表を行った。他に開催国インドネシアの 9 機関から 13 名がオブザーバーとして参加し、東京事務局から太田新生専務理事と事務局員の島村敬子氏が同行した。日本の津田教授と天野氏は、SEAMIC 東京本部の文献出版部会委員であり、当セミナーは同部会管掌であるため、両氏は今回のセミナーではいわば主催者側の立場とも言えた。

2. プログラム

8月26日の開会式から8月31日の閉会式までの間にテクニカル・ペーパー8題と各国1題ずつの現状報告が発表され、それぞれについて質疑応答、討議があり、その他に Key person の会合、見学、社交の集いがあった。昼食、夕食、お茶などはいずれも SEAMIC の準備によるもので、これらの非公式の時間は互の理解を深める上に大事なものである。このことは良く言われる “invisible college” につながるからで一緒に食事するのが親交を深める一つの道であろう。

総合議長には Luwarsih 女史 (Indonesian National Scientific Documentation Centre) が指名された。彼女は日本のちょうど JICST に相当する機関の長であり、ユーモアある聡明な婦人である。また総合書記にはフィリピンの Dimalanta 女史が指名された。セミナーの各セッションの司会と書記は、各国持ちまわりで分担した。次項にテクニカル・ペーパーと各国報告の要旨を紹介する。

3. Technical Paper

各発表は 20 分以内。() 内は発表者名。

a. “The need for joint efforts in the development

of a multilateral collaboration in health sciences library and information services among SEAMIC countries” (津田)

セミナーのテーマである多国間協力の必要を訴える基調報告。

b. “HELLIS planned activities of WHO/SEARO” (Khin Thet Htar)

WHO の South East Asia Regional Office (SEARO) の所管であるバングラディッシュ、ビルマ、朝鮮民主主義人民共和国、インド、インドネシア、モルジブ、モンゴル、ネパール、スリランカ、タイの 10 ヶ国を結ぶネットワーク計画 HELLIS (Health Literature, Library and Information Services) を紹介。SEARO 事務局はインドのニューデリーに所在し、Khin Thet Htar 夫人はビルマの人である。

c. “Network activities of WHO/WPRO” (Cheng)
マニラに事務局のある WHO の West Pacific Regional Division (WPRO) の計画である HERIS (Health Related Information System) を紹介した。この計画は同地域内の保健関係分野の①書誌の作成、②雑誌の調査、③雑誌所蔵目録、総合目録、受入リストの交換を目的としている。

d. “Training medical librarian and other related personnel” (Moedjono)

現在と将来を大事にするというところから有意義な教育が生まれるという考え方に立って「clientale oriented (利用者のための) サービス」について強調した。

e. “Improvement of photocopy service and the development of MEDLARS and other literature retrieval services” (Cheng)

SEAMIC の文献複写サービスと機械検索サービスの現状を述べ、地域の総合目録充実とテレックスの導入、機械検索要員の研修などの改善策を述べた。

f. “Strengthening of the SEAMIC publication activities and strategy ideas of collection development in library of SEAMIC countries” (Dimalanta)

SEAMIC の出版活動を概観し改善策を述べた。加えて SEAMIC による図書寄贈計画 (後述) をより改良するための提案を行った。

g. “Development of a data base for SEAMIC medical literature” (天野)

SEAMIC 参加国に有用なファイルを発掘し、データベースを開発する問題を取りあげた。*Bibliomed-SM*, *Philippine Index Medicus* などのデータベース化を摸索し、要員の研修などの基本的問題を列挙した。

h. “Editing of Guidelines for Medical and Health Sciences Library Practice in SEAMIC country” (Uthai)

医療図書館サービスのレベル維持、前進のために *Guideline* を編集する件は、SEAMIC 内部でかねてより懸案となっていた。いよいよ編集にとりかかるにあたり、その枠組を発表し、原稿の集稿状態等について述べた。

4. Country Report

各国の医療図書館サービスの現状を報告するもので発表は各 20 分。()内は発表者名。

a. インドネシア (Hartono)

インドネシアのネットワークの HeLDIN (Health Literature Documentation and Information Network) について述べた。

b. 日本 (高野)

医療情報を求めるすべての人に対応できるシステムが不在であるという根本問題を述べた上で、1977 年以降の状況として、①オンライン端末機の普及と JOIS の公衆回線文献情報サービス開始、②国の財政補助による外国雑誌の充実(拠点図書館システムの開始)、③国立生物医学情報センター(仮称)の設立を日本学術会議が勧告、④国内医学文献情報のオンライン化の 4 点を報告した。

c. マレーシア (Ahmad)

マレーシアの中心的な図書館として Institute of Medical Research, Medical Library of the University of Malaysia, Medical Library of the National University of Malaysia, Medical Library of the Science University of Malaysia があり、これらの図書館のサービスを紹介した。国内の大部分の病院ではこれらのサービスを十分に受けているとは思えないと言付け加えられた。

d. フィリピン (Rosal)

財政難で刊行中止になっている *Philippine Index Medicus* について、*Index Medicus* にはフィリピンの雑誌は 1 タイトルも収録されていないということ、フィリピン国内の索引誌は速報的でなくまた収録範囲も網羅的ではないということ等を訴えた。特に *Philippine Index Medicus* は SEAMIC のデータベースが

開発された時には是非入力してほしいと強調された。

e. シンガポール (Cheng)

シンガポール唯一の大学である National University of Singapore の医学図書館が全国すべての医療関係者にサービスしている。サービス内容は潤沢な財源に裏打ちされて活発に行われている。今後は国際機関の協力を得て ASEAN 諸国の医学図書館の機械化を促進すべきであると報告した。

f. タイ (Uthai)

全国 7 医科大学は比較的恵まれた状態にあるが、多くの小図書館は十分なサービスを提供できない状態にある。1980 年に WHO の後援によってタイで開かれた全国医療関係図書館のワークショップで、タイ全国のこの分野の図書館のネットワークを確立すべきことが同意された。しかし解決すべき問題は多いと報告された。

5. 見学

スラバヤ市の Airlangga 大学を見学した。この大学はインドネシアの SEAMIC key station に指定されていて、館長の Moedjono 夫人は前述のように現在は WHO 本部に出向中であるが、今回のセミナーに参加するため一時帰国していた。同大学は自然科学系と社会科学系の 2 キャンパスにそれぞれ図書館を擁し、一つの図書館システムを形成している。私たちセミナーの一行が見学したのは自然科学図書館である。概要は次のとおり。

広さ	4,875 m ²
収容可能	15 万冊
座席数	500 席
蔵書数	6 万冊 (単行書, 雑誌他)
受入雑誌種類	228 種 (1977 年-284 種, 1978 年-339 種, 1979 年-348 種, 1980 年-144 種)
年間増加冊数	2,000 冊
開館時間	月-木 7:30-13:00 17:00-21:00 金 7:30-11:00 17:00-21:00 土 7:30-12:00

(昼休みは、他の商業や学校などと同様で一勢に数時間とられる。暑い国々の特徴のようである。)

サービス対象 学生 3,795 人

教職員 900 人

(医学, 薬学, 歯学, 獣医学の各学部と Academy of Medical Analysis がある。さらに SEAMIC key station として大学外部の医療関係者にもサービスしている。)

図書館職員 56 名

(自然科学系, 社会科学系の両図書館の合計。うち 5 名は各学部の教職員が subject expert としてパートタイムで勤務している。)

図書館の広さは、「土地徹底利用型(そうせざるを得ない)」の私の勤務する東京医科大学図書館などに比べれば、実に広々と間隔をおいて閲覧機が配置されているなどうらやましい程であるが、正直言って 1981 年の受入雑誌数が 228 タイトルであると知って驚いた。昨年は受け入れたが今年は受け入れないというように同じタイトルでも年によって変動の大きい不安定な受入れ状況、しかもきわめて重要な雑誌が抜けているなどの状態で、とにかく一号でも受け入れてあるタイトルは合計して 877 種である。このことは、ごく短時間見学させていただいた Udayana 大学医学図書館(バリ島)の現在受け入れ中の医学雑誌が 60 タイトルでしかも *Index Medicus* は所蔵していないという状況からみれば Airlangga 大学は非常に恵まれた状況にあると言えるかもしれない。だからこそ Airlangga 大学が国内の SEAMIC key station に指定されたのであろう。またスラバヤ市内の Health Services Research Centre の図書室でも *Index Medicus* を所蔵していなかったが、たとえ自国の雑誌が *Index Medicus* に 1 種類しか収録されていないにしても、この二次資料がなくしてどのようにして重要な医学文献を探すことができるのだろうかと思うばかりである。Udayana 大学では日本医学図書館協会の「医学雑誌総合目録 欧文編」を欲しいと言っていた。また Health Services Research Centre では「SEAMIC 東京本部に申込んだ複写がまだ到着していない」と分厚いファイルを見せられたが、なんと 1980 年 4 月申込みのものが何十件もあった。申込書が東京に到着していさえすれば、何の応答もせずに 1 年半も放置しておく筈はない。「申込んでから 1 ヶ月しても反応のないものはその都度連絡してほしい」と本部の事務局員はその図書室の司書に答えていたが、そばでそのやりとりを聞いていて私はいささか驚いてしまった。郵便事情はそれ程悪いのか、それにしても返事のないまま長期間黙っていること自体不思議

なことではある。

6. 討議・勧告・問題点

一つ一つの発表のあとの質疑応答、討論などを通して問題を煮詰め、セミナーの最後に勧告案の採択が行われた。

a. 蔵書の充実

SEAMIC は現在参加国の蔵書を充実するため、1 ヶ国あたり U.S. \$3,000 (1981 年度) 相当の図書を寄贈している。この図書は key station (Depot) に配置され、その国内へは受贈された図書名を PR することにより Depot のみの財産ではなくその国全体の利用に供するよう求められている。図書は毎年 SEAMIC 東京事務局で用意される候補リストの中から 5 ヶ国が希望するものを選択することにより事務局において最終的に図書を決定して送付する仕組みとなっている。この事業は各国から満足をもってむかえられているが、選択リストには、医学書の他にもっとレファレンス・ブックや図書館関係図書あるいは公衆衛生や医学教育などの主題にも考慮し、またアメリカの図書が多いが、イギリスその他ヨーロッパの図書、AV 資料などもとり入れてほしいと勧告された。

図書にかわり雑誌予約代金を寄贈する形の方がもっと有効ではないかという日本側の提案は、雑誌は継続受け入れを前提とした資料なのでその財源を寄贈に頼ることは不安定であるという意見、特にタイとフィリピンによって受け入れられなかった。

また 1 ヶ国一律 3,000 ドル相当という枠も、シンガポールのようにすでに自国内で潤沢な財源と立派な図書館を持つに至った国からは返上してもよいという申し出があるなど、今後は事情によって、より持たざる国への援助へ流用、切り替えるなどのことも考えられている。また寄贈を受けた図書館が国内利用者に対してその受け入れ資料名をすみやかに PR する手段を講ぜず、あたかも自館だけが寄贈されたようになってしまっているのは残念であると指摘されている。

SEAMIC 事務局により今回提出された「国別寄贈図書リスト」はさらにこまかく図書名、主題等によりどの国が何を寄贈されているかをわかるようにしてもらいたい、と要望された。それが一種の図書総合目録にもなり、利用希望のある時に所蔵国を知ることができるからである。

SEAMIC の文献複写事業は大いに役立っている、今後とも継続されることを望むと同時にサービスのス

ピードアップのためテレックス導入を考慮してもらいたい旨勧告された。

SEAMIC の文献複写事業は、各国からの複写申込書（SEAMIC 専用）が SEAMIC 東京事務局で受け付けられるところから始まる。SEAMIC 資料室で所蔵していない資料の複写申込書は国際医学情報センターへ送付され同センター内あるいはさらに日本医学図書館協会加盟の各図書館所蔵館へ送られる。さらに日本国内で調達できない時は、BLLD など海外の図書館にも手配して複写を提供している。複写代金は SEAMIC 東京事務局からその財源を通して支払われ、申込者自身は無料となっている。1979 年 4 月から 1980 年 3 月までの 1 年間に 5,155 件の申込みがあり、5,007 件が処理された。¹⁾ また、1980 年 4 月から 1981 年 3 月までには 8,000 件の申込みがあり、7,386 件処理されている。1975 年に始まった当事業は、その 1975 年度の 8 ヶ月分で 1,168 件の申込みだったことに比べ増加の一途をたどっている。ASEAN 諸国からの海外文献複写依頼は、ある調査²⁾によると BLLD, SEAMIC, National Library of Australia などに申込まれている。この調査は医学を含む全分野の複写申込みの件数を対象にしているので、医学に限れば SEAMIC の複写提供者としての地位は 1 位に繰り上がるものと思われる。しかし一面、SEAMIC 5 ヶ国の中でインドネシア 6,281 件、タイ 1,143 件、マレーシア 304 件、シンガポール 251 件、フィリピン 29 件とその SEAMIC への申込み件数（1980 年度）に大きなバラつきがあることが指摘された。さらに SEAMIC 東京事務局から提出された複写受付雑誌別調査によると、*British Medical Journal* 132 件、*Lancet* 86 件等もっとも重要な雑誌名がランクされている。この報告は、複写申込みの誌名と件数のみの大雑把なリストであるが、もしこれを申込国別にさらに分類すれば、国内資料の充実の程度がより良く明きらかになると思われる、このリストの分析が勧告された。この予備リストによっても、「寄贈は図書よりも雑誌を」という SEAMIC 東京事務局側の考え方は拍車をかけられたのだが、反応は前述のとおりであった。

現在 SEAMIC 東京事務局から提供されるサービスは、複写、文献検索、図書など無料だが、将来参加国同士相互の活動が始まる時には、その費用をめぐる事務が繁雑になると思われる。その時のためにクーポンによる支払方法を検討すべきであると勧告された。

b. 相互貸借

上記のことにも関連してくるが、相互貸借は SEAMIC 東京事務局にのみ一方的に依頼するのではなく、参加国相互にさらに活発に行われるべきであると勧告された。このことは今回のセミナーのテーマである多国間協力の精神を具体的にとりあげたものである。相互貸借を活発に行うには組織づくりは勿論のこと、その加盟館の総合目録が充実していなくてはならない。このことは私達の日頃の仕事の中で当然のことと理解されていると思う。*PHLOSEA (Periodical Holdings in the Libraries of the Southeast Asia)* という雑誌リストが SEAMIC によって試験版として作成されているが、このリストは当地域内で刊行された医療保健関係誌のみを収録している。これをさらに拡大充実し、各国の所蔵している世界中の医療保健関係誌を収録しさらに所蔵館名を記入することにより、当地域内の総合目録として活用すれば、加盟各国同士の真の多方向的な利用ができるであろう。これらの考え方は SEAMIC 東京事務局から提案されると同時に賛同を得て、*PHLOSEA* の拡充が勧告された。

相互貸借や後述の文献検索サービスを含む SEAMIC の業務全般についてテレックスの導入が勧告された。テレックスは各国の国立中央図書館などの機器を利用することにより今すぐにでも使うことが可能であると確認された。

c. 書誌コントロール

医学・医療分野の研究にとってその分野の文献を検索するための書誌が必要なことは言うまでもない。しかし充実した書誌を作成するには膨大な費用がかかり、ましてこれを速報性、継続性、遡及性などの理想に向って機械化をはかるとすれば一国の事業にかかる程大事業であることは、日本の「医学中央雑誌」を見てもあきらかであろう。そこで機械化そのものは SEAMIC によるとしても、まずその基礎となる各国内で発生した文献を確実に把握することが肝要である。次に MeSH 等の国際的な医学件名表に即して各国固有の医学用語を調整し、総合目録を準備し、最終的には SEAMIC 加盟国全体共有のデータベースをつくりあげようではないかという将来を旨とした勧告が採択された。これまでも SEAMIC では東南アジアでもっとも必要とされる主題の感染症関係の書誌などをシリーズで刊行している。各国にはそれぞれ自国内の医学文献の重要な書誌がある。しかしフィリピンの Co-

untry Report でも報告されたが、*Philippine Index Medicus* のように資金難のため継続出版ができないでいるものがたくさんあるということである。SEAMIC では、これらの潜在的な書誌をバックアップしていきたいとしている。

d. 機械検索

MEDLARS の検索は各国の key station (図書館) のサインを得た上で東京事務局へ申込まれている。現在受付件数は非常に少い。その理由は、検索内容と MEDLARS のデータベースが必ずしも一致しない (たとえば日本の事情を考えても、MEDLARS にのらない日本の医学文献の検索についてはいつも問題になっている)、検索された結果が必ずしも満足のいくものではなかった、申し込みしてから結果が真の申込者に渡るまで時間がかかりすぎるなどが考えられている。SEAMIC が MEDLARS サービスを実施する以前にも、これらの地域の医学研究者は、National Library of Medicine, National Library of Australia, WHO 本部, WHO 西太平洋地域事務局 (WPRO: マニラ) 等を通じて MEDLARS のサービスを受けてきている。途中から始まった SEAMIC のサービスでは、申込者—申込者の所属する図書館—国内の key station (Key person の所属する図書館に一致している)—SEAMIC 東京事務局—国際医学情報センターあるいはその他の協力的な日本の医学図書館での検索、という経路で行われ、検索結果はその逆の経路で郵送されている。日数がかかるのはそのためである。さらに大事なことに、機械検索に重要なインタビューがこれらの長い申込みプロセスの間で段々に曖昧になってしまうことで、大勢の人が次々にメッセージを伝えていく電報ゲームを思い出す。また申込者と直接応対した第一段階でのインタビューに難点があり、思うような検索結果が上らないとも言われている。SEAMIC 東京事務局では、申込館と key station の間のステップをやめて、申込館から直接東京へ申し込んでもらう方式を考えたが、今回のセミナーではこの件は従来どおり key station 経由が支持された。また SEAMIC の提案を生かすために①テレックス利用によるスピードアップ、②文献検索のための要員の裾野を広げるための研修を行う、ことは最も重要なことと確認された。

e. 研修

医療情報サービスの要員の研修は、すべての活動の基盤となる大事な事業であるが、SEAMIC での研修

は、各国でそれぞれ終了された図書館学の基礎教育の上になりたつものと考えられる。上述の機械検索の研修も含めて、索引作業、reader's service などの特定のテーマにより短期研修を SEAMIC の費用で行うことが要望された。その際 SEAMIC は単独でこの事業を負担しなくても JICA (日本国際協力事業団) その他の機関と協力してプログラムを組むべきであると勧告された。

f. 出版事業

SEAMIC は各国に出版物に関する委員会を設定し、その委員会を通して出版物候補を推選してもらい、SEAMIC の費用で出版し、SEAMIC 参加国を含む各国に無料で配布している。出版部数は各出版物とも 1,000 部と定められて、この配布先には非常に気を配っている。今回のセミナーではその配布リストの見なおしを勧告した。すなわち key station を通して配布された人 (主として医学・医療分野の専門家) が SEAMIC 東京事務局から直接、重ねて寄贈されることがあるということで、貴重な部数が重複配布されることのないよう事務局と key station の連絡が必要である。このことはある分野の中心的研究者は誰がみても同じ人に落ちつくということなのかもしれない。この出版物は本来東南アジア地域に必要な分野をテーマとしているが、WHO や日本、その他世界各国の東南アジア専門家に寄贈されることによって学問の成果を広く流布するのに役立っている。このようにして寄贈された図書が、その領域の権威ある出版物等の書評などで紹介されることにより、出版物はますます価値を高めていくのである。

出版物としてとりあげるべき候補は前述のように各国の委員会を通すのであるが、新刊書の刊行だけではなく、各国で絶版になりながらなお要望の高い既刊書なども候補に入れるなど出版活動をさらに活発にすべきことが勧告された。各国には、各国固有の疾患についての医学書や医療教育、マニュアル、統計など財源難のために埋れているすぐれた資料がある。これらを発掘する手助けをするのが SEAMIC の役割である。SEAMIC はこれまでもすぐれた図書を出版し、加盟国の図書館で学生の指定図書としてボロボロになるまで利用された上、さらにそれらの学生から東京事務局へ自分用に直接寄贈してほしいというような要求があるという。世に出版物はあふれているようだが、そのような状況があることなど考えさせられる。

g. 他機関との協力

SEAMICは東南アジア地域の各種機関とあらゆる面での協力をはかるべきことが勧告された。今回のセミナーでも、WHO本部、WHO/SEARO、WHO/WPROなどの国際機関とは事業が大きく重複していることがさらにはっきり確認されたし、またSEAMIC加盟国の図書館はそれらのどれとも当然のことながら深い協力関係を保っている。またオーストラリアはインドネシアにとって非常に近い国であるし、さらに各国の旧宗主国であるイギリス、オランダ、それにアメリカなどは日本の私たちが考えるよりも、もっと彼らにとってなじみの深い国々である。BLLD, National Library of Medicine, National Library of Australiaなどの活躍も見のがすことができない。縄張り意識を越えた点でこれらの機関と協力し合い、もっとも有効な協力関係をつくるべきことが話し合われた。

III. む す び

日本医学図書館協会の加盟館は、国際医学情報センターの文献複写申込みを通して、これらの東南アジアの国々と間接的にではあるが連絡がある。このことは国際医学情報センターの申込みの一枚一枚に「東南アジア」というラベルが貼ってあるわけではないので、日常の業務の中では何ら意識されるわけではないが、私たちの図書館からの複写申込みがBLLDのバックアップ図書館によってイギリスのどこかの図書館からサービスされていることもあると考えてみると、決して自分の国の一国内で図書館サービスができるわけではないことを国際レベルでもう一度考えざるを得ない。また、資料充実、総合目録の整備、書誌コントロール、要員の研修などの問題が十分でない国々のあることを認識し、同じような問題をかかえる日本としてもいくらかでも協力できる道を探ることは大事ではないだろうか。

さらにWHOの巨大な影はセミナー全体において感じられた。セミナー終了後に日本でSEAMIC、WHO/WPRO、WHO/SEAROの東南アジア主管の国際機関が集まり、相互に協力し合う道を探ろうではないかと具体的に提案され、早急に実現される様子なのは当セミナーの成果の一つである。

去る9月のSEAMIC文献出版部会定例委員会は、日本側のセミナー出席者からセミナーの状況と勧告に

についての報告を受けた。勧告の一つ一つについていか

に具体化していくか、今後の宿題である。

私はこれまでSEAMICの活動に何ら関係を持っていなかったが、今回まったく突然にセミナー参加の機会を与えられ、出発前に2回参加者の簡単な内合せと、文献出版部会の傍聴、さらに帰国後の9月の同部会への出席によって自分なりにSEAMIC活動を理解することができたと思う。わずか1週間ではあるが東南アジアの人々と朝から晩まで、週末旅行にはビルマのKhinThet Htar夫人とは同宿するなどのおつき合いをし、自分の図書館だけ、自分の国だけを考えていてはかえって方向を見誤るのではないかと思った。またSEAMICのような国際協力事業においては、なんと言っても豊富な資金が大事であるが、すべての基本となるのは要員の教育に戻るのではないかと考えた。テレックス等でサービスが迅速に処理されるようになったとしても利用者と対応する第一線の人々のレベルが高まらなければ、提供する内容もそのレベルに留まるであろう。教育・研修は大地にしみこむ雨のように気長なものだが、またその効果があらわれる時は力強いものになる筈である。

はじめに述べたようにSEAMICの活動の中で図書館活動はその一つであり、私が見聞できたことはまたその中の一つである。SEAMICについては詳しくは下記にお問い合わせいただきたい。最後にセミナー参加の機会を与えて下さった日本国際医療団にお礼を申し上げます。

財団法人 日本国際医療団

東南アジア医療情報センター(SEAMIC)

東京都港区新橋4-7-2 (〒105)

第6東洋海事ビル

電話 03-432-2888 (代)

参 考 文 献

- 1) 裏田和夫：東南アジア医療情報センター(SEAMIC)の活動—特に文献情報サービスに関して—、第7回医学図書館員セミナー論文集、東京、日本医学図書館協会、1981、P.18-25。
- 2) Wijasuriya, D.E.K. and Bacha, A.K.: Interlibrary lending: a South-east Asian perspective, *Interlend. Rev.*, 9(2): 44-49, 1981.